

# Library Navigator

Pick Up

「立命館大学図書館の未来」座談会

Special Feature 1

「キャリア形成を考える上で  
影響を受けた本」特集

## CONTENTS

- P.2 「立命館大学図書館の未来」座談会
- P.6 [特集1] 「キャリア形成を考える上で影響を受けた本」特集
- P.10 [特集2] 読楽コーナー 学生選書スタッフ活動の紹介
- P.12 働き方・生き方考える上で読んでおいてほしい本
- P.13 Information
  - 館内MAP表示サービス開始
  - e-DDSサービス開始
  - リザーブブック制度開始
  - 「RAIL」運用開始
  - 図書館PRポスター(図書館長賞)紹介

立命館大学  
図書館だより

2010.11

110

# 館長 × 学生 × 職員

立命館大学図書館が目指す「未来」とは!? ラーニングcommonsはなぜ必要なのか? 新しい取り組みを始めている他大学などの図書館見学をふまえ、図書館長、学生、職員が、それぞれの視点から意見を交わしました。

**高倉** それでは、早速座談会を始めます。吉田館長から、今日のテーマについてお話しいただければと思います。

**吉田** 今年の6月に、いくつかの大学図書館の視察に行ってきました。その理由は、やはり立命館大学図書館の将来構想を考える上で、先進的な事例から学ぶ必要があると考えたからです。一番の問題意識は、ラーニングcommonsというコンセプトの下で図書館を現に運営しているところが、どういった様子なのかを見たいということです。

見学した際に私が最も注目したことは、その大学で図書館がどんなふうにあつていて、見学先の大学では、図書館を非常に大事にしているということの色々な表現でおっしゃっていました。

例えば、フェリス女学院で係の方がおっしゃったのは、「離れたところにあるキャンパスだからこそ学生たちが落ち着いて勉強できるように図書館に一番力を入れています」ということでした。自分の大学の置かれた状況を見ながら、その中で図書館を位置づける一つの例で、これ

は大事な視点だと思った次第です。

**高倉** 我々は教員や職員という立場で見学してきましたが、学生の皆さんからの見え方はまた違うと思います。今回座談会にご参加いただいたお二人は、昨年度実施された「理想の図書館プロジェクト」の活動の中で、いろんな図書館を見て、報告書にまとめられているようですが、他大学の図書館を見て良いと思ったところ、立命館の方が進んでいると思ったところをお話してもらえればと思います。

**小川** 私は関東にあるお茶の水女子大学を訪問しました。図書館に入っただけで、**すごく明るい印象**を受けました。それは立命館の図書館にはない印象でした。昨年の活動の中でアンケートをとった際にも立命館の図書館は「静か」というイメージが多かったです。お茶の水女子大学は「明るい」とか、「わきあいあい」というイメージを最初に受けました。

その印象を受けた理由としては、ラーニングcommonsの考えを積極的に取り入れ

た仕組みが見えたからだと思います。入り口すぐに学生たちが喋れるような、BKCで言うとセントラルアーク1階のようなイメージで、机も自由に組み合わせられて、なおかつ、飲食も軽くできて、さらにプレゼンの話し合いもできる、そのようなスペースが最初に目につきました。そういった空間があることで、**学生の自由で活発な印象を図書館の中に表現**できていて、その点は今の立命館の図書館には足りない部分で、取り入れるべきだと感じました。

**大西** 僕は横浜国立大学の図書館に行きました。図書館の中を見て一番印象に残っているのは、パソコンの使えるグループ学習室がたくさんあるな、ということです。立命館の場合はマルチメディアルームが図書館の中にありますが、個人の自習がメインで、グループ学習ができないので、そういうところを改善していく必要があると思いました。

また、横浜国立大学の図書館がリニューアルされた際に、**学生がデザイン等に深く関わっていた**という話を聞きました。例えば図書館全体のデザインは建築学科の学生を中心に行ったそうです。館内には角度や向きを変えたら椅子になる机など、機能的でかつ面白い備品も多くありました。更に、**長時間滞在する利用者**に配慮して、いろんな形の椅子や机があって、気分を変えたい時は別の形の椅子のところに行って勉強することも可能でした。また、携帯電話専用のブースも備わっていました。学習者中心の視点やラーニングcommonsの視点といった理念が立命館より進んでいるなど感じました。



館長

吉田 美喜夫 先生  
法学部教授・図書館長



副館長

高倉 秀行 先生  
理工学部教授・副館長

**吉田** 私も共通の印象を持ちました。第一の点は、入った時の印象が、やはり明るいですね。明るい理由は書架の高さとか柱の有無とか、それから大事なのは照明ですね。朱雀の地下の図書館の照明は一応最先端の照明ですが、照明ひとつで同じ図書館でも雰囲気がずいぶん違います。そういう要素を考えていかなければいけない。**図書館というものを「場所」ではなく「空間」と考えることが、私はこれからすごく大事だと考えています。**

学生がデザインに関わるというお話でしたが、私は最大の利用者という点から見てぜひ学生が加わる必要があると思います。それから机とか椅子についても、自由に動かしたりできるだけではなく、良いものを揃えているんですね。デザインとか堅牢さとか、安っぽいものかどうしても扱いがぞんざいになるわけで、やっぱりこれは大事にしなければいけない、**自分たちだけでなくこれから後輩たちも学んでいく、そういう空間になっていくんだということを感じさせるような意味を持つ**と思えるんですね。そういうあたりを相当考えているな、という感じがしました。

**小川** そうですね。確かに図書館を空間と捉える点で、東京の千代田区の区立図書館は、机、棚にすごいこだわりをもっていらっしゃいました。皆で使う丸いテーブルは北欧のデザインのものを取り入れていて、棚は真っ白でした。白の棚に敷居の板が黄緑の場所は一般的に皆が使うもので、赤色のテーブルと棚のコーナーはビジネス用、黄色や青は小さい幼児用というふうに、視覚的に分けられていました。コンセプトが伝わりやすい空間デザインになっていました。空間から変えていくということも立命館に取り入れられたら、学生には伝わりやすいのではと思いました。

**吉田** 大西君が紹介してくれたグループ学習の話について、私が一番印象に残ったのは、東京女子大の図書館でした。入ってすぐ右側がラーニング commons になっていますからね。学生の皆さんが机で一人本に向かってぐっと集中しているというイメージではなく、皆が本当にわいわい



としていて、声も出ているし、**動きのある空間**が作られていました。**人を引きつける、足が向く空間**ということを考えていくことが大事だと思います。ただ、これは難しい点で、やっぱり静かなところに行きたいということを考える人だと、1階にそれがあると抵抗を感じるかもしれない。その点は今後十分に考えなければいけないと思います。

いずれにせよ、commons のコンセプトは**出会いの空間**にしていこう、ということです。知らない者同士が学部を超えてコンタクトをとっていくというようなことが私は期待できると思います。グループ同士がこっちでわいわい、あっちでわいわいしていて、それでふと気がつくとか何か面白そうなことをやっているということに気がついて、それで「ちょっと教えてくれない?」「話してくれない?」というような、こういう出会いがどんどん出ると、図書館というものが本当に面白くなる。私はそれを「**学びの交差点**」という言い方をしています。図書館が心臓ようになって、そこから血液がわっわっと全学に行き渡っていくというんでしょうか、そういう意味で、図書館あるいはラーニング commons が心臓になっていく可能性があると考えています。

**高倉** 「**学びの交差点**」や空間を構築していくためにはハード面だけでなく、その中に何がつまっているのが大事になりますね。ソフト面やサービス面で、立命館は

もっとこうあったら良いな、あるいは、立命館の図書館サービスはこういう良いところがあるなという点はありますか。

**大西** 国立国会図書館に行ったグループの人から、カウンターサービスの過不足なく行われていて感心したという話を聞いたので、どのような様子なのか一度見てみたいと思いました。

**小川** 国立国会図書館は私も実際に行きました。本を利用する際は全てがカウンターで機械か人を通して提供されます。借りたい本があればすぐに対応してくれるのですが、私はなぜ図書館が好きかと考えた時に、本に囲まれているということが挙げられます。サービスという点では良かったのですが、本が利用者からは見えないので、これは本当に図書館なのかというような寂しい印象しか残りませんでした。

**吉田** 今の話の中には大事なことが含まれていると感じます。やはり図書館では、**本の存在感**が大切ですね。本というのは、それを著した人の大変な努力の結晶です。その本の中身を書く上では、本当にたくさんの本を読んでいますから、1冊の本の背景には何百冊という積み上げがありますね。そういう本が図書館の書架に並んでいます。それを目の前にすると、それだけで図書館に足を運んだ人に何がしかの脳細胞に刺激を与えるに違いないと

私は思っているわけです。図書館は、本の存在感というものが皆さんに影響を与える、そういう刺激の空間だと考えることができます。

これに関して、私は上智大学の図書館も見学して、図書館はやっぱりこうあるべしと思ったのは、全部開架式なんです。その観点から見ると、上智大学の図書館は、恐らく100メートルくらいの長さの書庫に書架がずらーっと並んでいて、それが全部開架式ですから、その間を巡って本を探したり、眺めることができます。それを見るだけで、私なんか本当に興奮しますね。そういう場所をこれからは作っていく必要があります。

**高倉** 大阪大学のラーニングcommonsに行った時に、TA、TSのような方が必ず常駐していて、聞きたいことはその人たちにも聞けるというようなサービスを見てきましたが、そういうようなものの必要性は学部生の皆さんから見た時にどのようにあるべきだと思いますか？

**小川** そうですね。学生ライブラリースタッフ (LS) の方が展示やポスター等いろいろ考えたりしているのは、図書館の中を見ればすぐ分かるのですが、その取り組んでいる姿を実際に見ることができないので、一般の学生に伝わってこないです。館内にも少し気軽にコミュニケーションを取れる場があれば、LSと学生、LSを通して学生と図書館の間も深まると考えています。カウンターに職員さんがいらっしゃるのですが、そのカウンターまで行く過程が、ちょっと壁が高い気がします。図書館にグループで話し合

う空間があって、そこに常にLSの方がいれば、もっと気軽にいろんなことを聞きに行けると思います。自由に喋れる空間があることによって、今のような本が流行っているとか、学生が図書館に対してこう思っているという素の意見が引き出しやすくなると思うので、やはり皆で喋れるような空間が図書館の中に今必要だと強く感じます。

**大西** LSが常駐しているカウンターがあって、「この本探しているけどどこにあるんですか」と気軽に相談できるようになったら良いかなと思います。本だけでなく論文の書き方とか、アカデミックなことも含めてラーニングcommonsの空間にそういう人がいて気軽に相談できるような場があれば良いかなと思いました。

**吉田** その点で、東京女子大では、立命館のLSに相当する学生の皆さんが、経験を積んで作業内容のレベルが上がってくると、進級できる仕組みを設けていると聞きました。これは、獲得すべき能力の目標をはっきりさせるという意味で大事だと思うし、またモチベーションを上げる上でも大事です。その意味で、どういうレベルまで求められるのかというサービスの中身をもっと客観化する必要があります。

**高倉** 学生が必要とする学習支援をどのようにしていくか、という話に進んできていますね。では図書館がサービスできる学習支援というのはどうやったらいいのかということ、むしろ学生の皆さんの視点から出してくれたらありがたいと思います。

**安東** 私の方から話題提供いたしますと、図書館ではラーニングcommonsということで、なるべく図書館を中心としながら学習環境を作ろう、となりますが、でも実際には大学全体でどう学習環境を作っていくかということが本当に大事です。先ほどBKCのセントラルアークの話がありましたが、セントラルアークはもともと学生の滞留場所ということで作っていますが、そこにもう少しアカデミックな要素を今からでも付加して、そこと図書館との連携が本当は必要だと思っています。

国内でうまくいっている例というのは図書館だけではなく、色んな場所に学生の居場所を作り、学生同士の交流は当然のこと、学生と教員との交流、場合によっては教員と教員との交流、その中に学生が入っていくという仕組みを作っています。図書館というのは大学から学生の皆さんに対するメッセージの場所だと思います。図書館を見るとその大学がどういう学術スタイルを狙っているのかがわかります。そういう意味で、BKCの2館はまだいいんですが、衣笠はあまりにも歴史がありすぎて(笑) ちょっとそのメッセージが今どきに合っていないのかな、という気はしています。

**高倉** 外に対してもこんなすごいものがあるんだという、顔としての図書館をきちっと整理していく必要がありますね。

**吉田** ラーニングcommonsとは何か、という問題になりますが、少なくとも情報機器が完備していること、それから様々な相談支援のカウンターがあって、相談に乗ってくれる人がいるということですね。あるいは、グループ学習ができるような施設条件もある、場合によってはプレゼンテーションなんかをすることもできる、と。それだったら立命館も、例えばセントラルアークなんかも、もうそういう意味での要素だったらあるじゃないかということですが、私はそれではあかんと思っています。本と結びつける仕掛けができていないとラーニングcommonsとは言えないと思うわけです。だから図書館の中に設けるのが一番ある意味で手取り早いわけで、それで図書館とラーニングcommonsとを結



小川 里奈さん  
経営学部 4年生



大西 佑樹さん  
経済学部 2年生

びつけなきゃいけない。

学生の「たまり場」というのは、今色々な大学で作ってきているし、立命館でも学生共研とか談話室とか、色々なものがあるので、たまり場という点ではあると思います。これは確かにステューデント commonsということになりますが、これは学生のたまり場であって、まだラーニング、学ぶというところにはなりきっていないんじゃないか、ということです。やっぱりラーニング commonsというのは、そこでわいわいがやがやして、それで終わりじゃなくて、**本を読んだり本で調べたり、というところに一歩踏み出して**いこうな、そういう空間でなければいけないと思います。そこをどうやって結びつけるのか、ここが大事で、このためには学生の皆さんの果たす役割はすごく大きいと思います。相談の中身ですね、ピアエデュケーションです。学生同士で学ぶ。こういうことを通じて、ただ話を聞いて終わりじゃなくて、むしろそれが刺激になって問題意識を持ち、それじゃあ自分で調べてみようというところに一歩踏み出していこうな、そういう相談支援のカウンターにしなきゃいけない、というように思います。

**高倉** さて、座談会も終盤に差し掛かってきましたが、立命館の図書館をどのようにしていったら良いかということ、将来構想検討委員会の中で昨年度にまとめられたものがありますよね。このへんの話も含めて、ここまで話が進んでいる、でももっとこういうところが足りない、というところがあれば紹介していただいて、それを踏まえて意見交換できたらいいと思います。

**安東** 検討委員会では図書館の「位置づけ」を直したと思っています。これまでの図書館というのは、建物があってそこに本がある。図書館は資料の提供してればよいというレベルだったのですが、今回のこの検討委員会の結果を受けて、単なる場所だけでなく空間としての図書館、学習環境を作っていく図書館、大学の心臓・顔だとかそういうふう、この1年間で大学の中で図書館に関する認識が大きく変わったと僕は思っています。



職員

安東 正玄さん

職員歴 17年



職員

柚木 一さん

職員歴 4年

更に次の段階に進むためには、それを具体化していく作業が必要だと思います。具体化のときには学生の声も必要ですし、やはり**授業との連携**ですね。これがないと、傍から見ると図書館はやっぱり箱ものにしが見えないんですね。本に囲まれて勉強する、勉強している姿を見ながら勉強するというのが一番学習効果があると思っています。一人で勉強するのではなく、グループ学習の環境をどういうふうに創っていくかというのは、図書館だけの話ではなくて、大学の中の学習空間をどう創っていくかという議論も他の部署でも始まっていますので、流れに乗りながら先に行くと言うんでしょうか。館長もこのように燃えていますので、この波を消さないように私たち職員も頑張らなきゃと思っています。

**高倉** そういう仕組みをつくらないと無理だと言うことですね。だから、いかに教員との連携をするかという、その仕組みを考えないと難しいよね。

**小川** 普段お仕事されている姿が見えないというのも、壁を感じる要因だと思えます。お茶の水大では、図書館の中に入っている職員の方のスペースがガラス張りになっていて、何をしているのかが見えるようになっていました。顔が見えると話しかけやすいですね。お茶の水では、質問も学生スタッフだけではなく職員の方にも、今あの人は手が空いているから喋りかけようかな、というような**連携をとりやすい空間作り**がしてありました。逆に職員の方からも図書館でどのように学生が勉強しているか、どのようなグループ学

習をしているかというのも見てもらいやすい。そのような空間は今の立命館に必要だと、皆さんの話を聞いていて思いました。LSと学生の壁や、職員と学生の壁というのも、今の立命館にはまだまだあって乗り越えにくいので、**空間を変えることから関係を変えて**いけたらいいと思うので、ガラス張りというのは私がお薦めしたい提案の一つです。ぜひ実現できたらいいと思います。

**吉田** いろいろこうしたらいい、ああしたらいい、ということ寄せ集めたら理想のものになるという話にはならないと思います。今までに立命館がやっていることもあります。しかし、これを再定義しなければならぬ。再定義というのは、目指すべき方向からそれぞれの要素というものを意味づけて体系的なものにしなければいけないということです。これが、先ほど安東さんが言われたように、次の話なんです。

いろいろな要素を結びつけていく時に、やっぱり理想が高くなければ要素は集まらない。

そういう点で、立命館は、ラーニング commonsについて言えば、後追いのところがありますね。確かに後追いだけと、ところがうちには無自覚的に既に持っているいろいろな要素があるわけだから、これを**高い理想で求心力を持って再定義**することによって、まさに理想の図書館というものができあがってくるのではないかと、こういうふう思うわけです。

**高倉** ちょうど時間になりました。

**一同** ありがとうございます。

# キャリア形成を考える上で 影響を受けた本

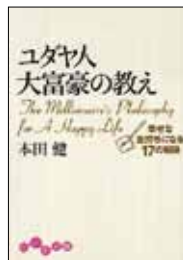
## 1 『ユダヤ人大富豪の教え 幸せな金持ちになる17の秘訣』

法学部 法学科 4回生 水田 明里さん / 独立行政法人日本貿易振興機構 (JETRO) 内定

本田 健 著 (大和書房) 2006年

働くことに関して話をするときには、必ずと言っていいほど苦労話やお金の話がついて回ります。本書では、「幸せに働き、お金を稼ぐ」ということは何か、そのためにはどうすればいいのかわ、当時私たちの年代であった著者が、アメリカで出会ったユダヤ人大富豪から学ぶ様子が描かれています。

私は、就職活動中に本書を読んだことで、手当たり次第に企業を受けることを止め、どうすれば自分に合った企業が探し出せるのかと考えるようになりました。明確な「自分」というイメージを持たず就職活動をしていた私に、本当の「自分」と向き合うきっかけをくれた一冊です。本書を読み終えると、「早く社会に出て働きたい!」と思うかもしれません。



## 2 『最後の授業 ぼくの命があるうちに』

文学部 人文学科 4回生 逢阪 昌也さん / 株式会社ベネッセコーポレーション内定

ランディ・パウシュ、ジェフリー・ザスロー 著 矢羽野 薫 訳 (ランダムハウス講談社) 2008年

「夢・目標は達成できるものである。」2年前にこの本を読んで以来、自分は外国でシンポジウムをしたり、希望の会社に内定をいただくことができた。こう書くとはウツ一本の類に見えるが、決してそういう本ではない(夢をかなえるコツについては話すけど)。余命数ヶ月の大学教授が「子どもの頃からの夢を本当に叶えるために」というタイトルで生き活きと語る自分の今までの人生や仲間や大切な人たち。人間一人が自分の命を懸けて伝えてくるメッセージはあまりに重い、学生のうちに受け取ってほしい。人それぞれ感じることは違えど、生きることや夢に対しての姿勢にきっとなんらかの影響や哲学をもたらすと思うから。



## 3 『「粗にして野だが卑ではない」石田禮助の生涯』

政策科学部 政策科学科 4回生 村瀬 綾さん / 伊藤忠商事株式会社内定

城山 三郎 著 (文藝春秋) 1992年

総合社に行きたい理由を説明できるだろうか? 給料やブランドに勝る何かを堂々説明できるだろうか? 商社には商社の存在意義があり、商社マンには商社マンの哲学がある。これらを理解して初めて、商社を心から目指すことができるのではないかと思う。本書は人間サイドにスポットを当てた、日本を代表する商社マン、石田礼助の伝記である。就職活動の方法論を理解することももちろん重要である。しかしながら、こうした琴線に触れる伝記を読むことで初めて、心の底から湧き出るような志望動機に出会えるのではないかと思う。決して商社を志す学生に限らない。全ての日本を背負っていく学生に読んでもらいたい一冊である。



皆さんの将来の「夢」や「目標」は何ですか？ 将来どのような職業につき、どのように働いていこうと考えていますか？

110号ではキャリアセンターの紹介で、後輩の就職サポートを行うことを志願してくれた「ジュニア・アドバイザー（就職内定者）」、「キャリア・アドバイザー（OB・OG）」の皆さんに、「働き方」・「生き方」を考える上で影響を受けた本を紹介してもらいました。12人の執筆者がそれぞれの経験を踏まえ、在学生の皆さんに向けた熱いメッセージを語ってくれています。「本」はときに読んだ人の価値観・人生を大きく変えてしまうといっても過言ではありません。皆さんもぜひ、お気に入りの図書を図書館で探してみませんか？そこからあなたの新たな人生の一步が始まるかもしれません。

## 4

国際関係研究科 国際関係学専攻 2回生 大江 真利恵さん／三菱自動車工業株式会社内定

### 『世界がもし100人の村だったら 完結編』

池田 香代子、マガジンハウス 編（マガジンハウス）2008年

1年間の交換留学をしていた大学3回生のとき、この本に出会いました。

厳しい環境で学んでいるうちに大きい目標ばかりに目がいき、私は自分の本当にしたいことがわからなくなっていました。しかし、簡潔にまとめられている世界の現状、世界を変える10人の活動、そしてこの本の最後に書いてある「どんなに大きな力も、わたしたち一人ひとりのちいさな力の集積には敵わない」という言葉から、世界を舞台に活躍する夢に向けて一歩ずつ進んでいくことの大切さに気付かされました。

世界を意識するきっかけが欲しいとき、また就職活動中に焦りを感じたときにお薦めです。写真も多く目を通しやすい本なので、たくさんの人に読んでもらいたいです。



## 5

政策科学部 政策科学科卒業 野添 智紗さん／マイクロソフト株式会社

### 『私はこうして受付からCEOになった』

カーリー・フィオーリーナ 著 村井 章子 訳（ダイヤモンド社）2007年

「受付からCEO?」表題からインパクトのある本で、就職活動の帰りに購入しました。カーリー・フィオーリーナという元ヒューレット・パッカード社の社長をしていた方の成長物語。女性が第一線で働くということ、ビジネスの仕組み、チームビルディングの仕方、転職、など社会に出る前に知っておくべきエッセンスが盛り込まれています。女性の企業トップというのはベンチャーでは増えてきていますが、大企業は今もお珍しい。成功だけでなく、挫折や失敗も得て、何とか諦めずに立ち向かう彼女の姿が目に見え、非常に勇気をもらえます。日本ヒューレット・パッカード社を受ける際、面接でのネタ、企業研究としてもお薦めの本です。



## 6

産業社会学部 産業社会学科卒業 井東 裕太さん／東京海上日動システムズ株式会社

### 『トップ・レフト ウォール街の鷲を撃て』

黒木 亮 著（角川書店）2005年

楽しい仕事をするにはどのような働き方をするか？ 仕事を選ぶ際にはこのことをしっかり考える必要がある。

「トップ・レフト」はまさに20世紀後半、国際協調融資の主幹事（トップ・レフト）をめぐる日系銀行のロンドン支店で働く今西と外資系投資銀行で働く龍花の熾烈なビジネス闘争を描いている。この今西という男は当時日本の銀行がロンドン市場劣勢の中で日本の名を広めるべく多くの人々と関わりながら信用を勝ち得ていく。そして「トップ・レフト」を手に入れる。

どんな状況でもチャンスと思えば多くの人と交わり信用を得る。そして目標を達成する。楽しい働き方とはそういうものではないだろうか。働き方を一度考えてみてはいかがでしょうか。



## キャリア形成を考える上で影響を受けた本

経営学部 国際経営学科 4回生 村上 愛さん／株式会社アシックス内定

### 7 『現役大学生による学問以外のススメ 実在学生21人による「学外活動」ドキュメント』

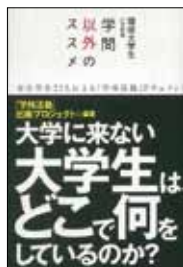
「学外活動」出版プロジェクト 編著（辰巳出版）2007年

大学生活で何を学び、どんな成長を遂げましたか？ 将来、やりたいこと見つかりましたか？ 悩んでいるなら読んでほしい、読んで刺激を受けて視野を広げてほしい、お薦めの1冊です。

この本には大学に来ない学生の20通りの学外活動が紹介されています。起業・バックパッカー・総合格闘技・チアリーディングなど、この本で学べる「学外活動」の一例です。

しかし、「学外活動」の内容よりも、挫折や苦労を繰り返しながら挑戦し成長していく彼らの姿に感銘を受けました。この本を読んで、自分が本当にやりたい・成し遂げたいことは何かを深く考え、新しいことに挑戦するきっかけになればいいなと思います。

※本書に出てくる同姓同名の人物は、私と一切関係ありません。



経済学部 国際経済学科 4回生 徐 子錚さん／伊藤忠商事株式会社内定

### 8 『負けてたまるか！ 若者のための仕事論』

丹羽 宇一郎 著（朝日新聞出版）2010年

就職活動が進むにつれ、私は社会人になることを次第に意識し始めた。働くことの意味とは何かといった疑問を抱くようになった。それらの答えは、本書の中にあった。現在の日本は未曾有の危機に直面している。少子高齢化が進み、労働人口も減り、国力が劇的に低下している。このような日本を救うことができるのは、エネルギー溢れる情熱を持った若者たちである。私は、アリのように泥にまみれて働き、信念を貫き、自らの若者青臭さで日本、そしていずれは世界を明るく照らしていこうと思った。このように私を奮起させ、自らの夢に向かってまっすぐ走るように励ましてくれたこの本は、今後、社会に出て働こうとする若者にとって最高の一冊である。



理工学部 電子情報デザイン学科 4回生 田附 隼さん／株式会社NTTデータ内定

### 9 『道は開ける』

D・カーネギー 著 香山 晶 訳（創元社）1999年

就職活動は自分自身を大きく成長させる貴重な機会であると同時に、多くの悩みから来る不安があなたを襲い自信を失わせてしまうことが多くあります。本書はそういった悩みの本質を見抜き、解消するためのコツが事例と共に解説されています。この本を読めばきっとあなたの悩みを解決する為のヒントが見つかるはずです。

悩みを無くし、皆さんが夢に向かって日々全力で活動できるようになればと想い、この本を推薦させていただきます。カーネギーの著書はどれも有名で良いものばかりですが、同著者の「人を動かす」「話し方入門」を併読することをお薦めします。特に「話し方入門」は人と話すのが苦手な人にとって大きな助けになるはずです。







10

理工学研究科 創造理工学専攻 2回生 嵩 裕一郎さん／シャープ株式会社内定

## 『日経業界地図』

日経経済新聞社 編 (日本経済新聞新聞社) 2004年～

理系だからと、専門で就職先を絞ってしまうのは非常にもったいないと思います。

例えば機械を専門としている人材は、機械を商品として扱う業界だけでなく、食品業界や化粧品業界、マスコミ業界でも必要とされており、私自身も家電メーカーに自分の適性を感じ、就職活動を行いました。また、理系企業だけでなく商社などの文系業界も見れば、開発された製品がどのように販売されるのかを知ることができ、それまでとは違った視点から、就職について考えられるようになるでしょう。

私たちは企業について素人なので、広い視野で就職活動を行うためにも、まずは世の中にどんな業界があり、どんな企業があるのかを知ることが大事だと思います。



11

理工学部 ロボティクス学科卒業 高嶋 和幸さん／西日本旅客鉄道株式会社

## 『手紙屋 僕の就職活動を変えた十通の手紙』

喜多川 泰 著 (ディスカヴァー・トゥエンティワン) 2007年

就職活動では「内定を取ること」が目的になりがちです。しかし、本当の目的は違い「定年までの居場所を見つけること」だというように、読んでいるうちに気づかされます。また、その仕事(もしくは会社)が自分に合っているかは、働いてみると分からないと思います。それに固執していると会社選びができないので、それよりは「会社が何を目標として活動しているか」など、共感できる部分を発見することが一番良いと思います。この本を読めばそのようなことに気づかせてくれます。

そして、もう一つ素敵なおところは、社会人になった自分が読んだ時、初心に戻ることができます。壁にぶつかった時や悩んで先に進めなくなった時に読むと、これからのヒントになります。私にとってずっと手放すことのできない愛読書の一つです。



12

理工学研究科 情報理工学専攻修了 谷合 学さん／アクセンチュア株式会社

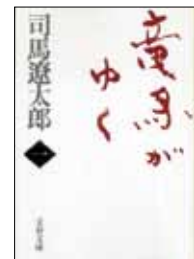
## 『竜馬がゆく』

司馬 遼太郎 著 (文藝春秋) 1998年

今年は注目を浴びることが多い坂本竜馬。幕末の時に何を考え、どう生きたのか。竜馬について知ることが出来る歴史小説です。

周りの影響を受けることなく、機会が来るまでじっと待ち、チャンスと見たら動く、小さな枠で考えることなく大きな視野で考える。それを自身だけでなく周りにまで影響を与えてしまう竜馬のすごさを知ることができます。そんな竜馬の生き方を読み、自身も社会に影響を与える仕事に就きたいと思い、コンサルタントという職業を選びました。社会人の今でも読み返す度に、コンサルタントとして必要なモノは何か考えさせられる小説です。

本を読んで受ける印象は人それぞれです。自分にとってより良い本に出会えたら良いですね。



# 特集2 読楽コーナー 学生選書 スタッフ活動 の紹介



読楽コーナーは2007年度に学生への読書推進・幅広い教養の習得のきっかけ作りとして開始し、今年で4年目を迎えます。さらに、2009年度後期より「学生のニーズに沿った資料を収集・提供すること」・「選書スタッフがチームで企画・実践を通じ、組織で活動することの意味を体験すること」の2つを目的に、「読楽コーナー学生選書活動」を行っております。110号では2010年度前期の活動を衣笠・BKCともに紹介します！

## 衣笠

衣笠キャンパスの学生選書スタッフは、テーマ「冒険への羅針盤」を設定しました。これは、学生に刺激を与え自己成長を遂げる心の冒険の羅針盤たる存在として書籍を手にとって欲しいという想いによるもので、3つの冒険をテーマ内に盛り込みました。1つ目の、物語世界の中で登場人物と共に成長する「ページをめくる冒険」では、森見登美彦さんの「四畳半神話体系」といった現代の学生が共感するような小説を選びました。2つ目の、探究心を育て学問の世界に踏み込む「知の冒険」では、村上春樹さんの「やがて悲しき外国語」といった、学問の世界に関連するエッセイ等を選びました。3つ目の、好奇心をかきたてる「知らない世界の冒険」です。林真理子さんの「下流の宴」といった、自分の知らない世界を垣間見るような作品を選びました。



## 選書スタッフ感想

選書スタッフとしての活動は、自分と違う学部・学年の方たちとグループで何かを創ることができて新鮮でした。また、他のスタッフの人たちの多様な価値観に触れたり、好きな作家さんについて語り合ったりすることで、自分の読書の幅が広く深くなりました。図書館で、自分たちが選んだ本を借りていく人や、自分たちが作った掲示物に目を留めている人を見ると、改めて達成感を抱き、自分も立命館大学の一員なんだと感じました。一人でも多くの人が、学生選書の本を読んだことをきっかけに、学術書も気軽に手に取れるようになってほしいと思います。全体を通して、やり甲斐のある楽しい活動でした。ありがとうございました。

選書のテーマはひとつでも、選書スタッフひとりひとりが選んできた本には歴史小説やノンフィクション、ミステリーなどさまざまなものがありました。選書スタッフの活動を通して、いろいろな考え方の人々に出会うこ

とができ、普段は手に取らないような本にも興味を持つことができました。活動中は大変なこともありましたが、いろいろな考えを持った人たちに会えて本当によかったと思えました。今までは知らなかった考え方に驚いたり、自分と同じ気持ちを見つけて嬉しくなったり、本を読むことは、人と出逢い繋がりあうことに似ているなど感じました。



## BKC

今回の選書活動では、読書を通して今まで自分が知らなかった世界に触れてほしい、という思いを込めて「未知の世界へ…」というテーマを設定しました。未知の世界と聞いて皆さんが連想するものは、不思議な異世界の冒険でしょうか？ それとも壮大な宇宙の探索でしょうか？ 顕微鏡で見えるようなミクロの世界、という方もいるかもしれません。私たち選書スタッフは、本の中に広がる世界を楽しめるファンタジーや冒険物、日常の中の出来事を描いているのに新鮮な気持ちになれる物語、様々な人の生き方や考え方を知ることのできるエッセイ、ノンフィクションなど、ジャンルを問わず選書を行い、自分たちと同じ学生の皆さんに気軽に読書を楽しんでもらえるように工夫しました。これらの本を通じ、学生の皆さんと新しい世界との出会いのきっかけを作ることができたならばとても嬉しく思います。



## 選書スタッフ感想

選書活動は年齢や学部、学科すべて異なる5人が集まり、その日から活動を進めていくものでした。初めに集まった日は皆とても静かであまり意見も出ず、本当に完成させられるのか不安になりました。意見の取りまとめも日程の調整も難しく、限られた時間の中で色々なことを決めていかなければならず、チームで動くことの難しさを痛感させられました。しかし、テーマの設定に始まり、選書リストの作成などを通じて皆が意見を出し合うようになっていき、ポップや紹介文の作成、配架を行う頃には信頼関係を築くことができました。そして、私たち5人は配架を終えたとき、心から嬉しいと思えて、その気持ちを全員で共有できました。全くの他人だった私たちが最後には同じ気持ちでいられたのは、読書という共通の趣味を持ち、読書の楽しさをいろんな人に伝えたい、読書を通して未知の世界に出会ってもらいたい、という強い気持ちが一致していたからでした。

本は人と同じで、一つ一つ異なるものだと思います。未知の世界へ…というタイトルをつけてたくさんの人に読書の楽しさを知って欲しいと思って始めた活動でしたが、私たち自身が未知の世界を知ることができました。

本の選書では、『未知の世界』というように様々なジャンルを選びました。また、本に興味を持ってもらえるように作品の表紙や面白い題名のものを選びました。今回驚いたのが、読書好きが集まっているのにメンバー全員が全然知らない本がたくさんあることです。そして、今回の選書活動を通して一番の経験になったのは人に伝えることの難しさです。POPやポスターの制作する過程で文字の表現、画像や文字を選出など普段何気なく見てきたポスターでもこんなにいろいろ考えているのだなあと思いました。

また、一番苦労したのは、みんなでの共同作業です。回生や学部も違うこともあってわずかな時間しか活動できませんでした。なかなか作業が進まず、配架も期限を延ばすなどぎりぎりの完成となりました。しかし、すべてが完成してみんなで紹介の展示を見たときは本当にやって良かったと感じました。

皆さんもぜひ読楽コーナーでお気に入りの一冊を見つけてください。📖

# 働き方・生き方を考える上で 読んでおいてほしい本

～大学生のうちに読んでおいてほしい本〈特別編〉～

vol.7 加藤 敏明 先生 (共通教育推進機構教授・キャリア教育センター長)

今号はコレ!



山あり谷ありの人生を一本の轍でつなぐ大切さ

## 『遅咲きのひと—人生の第四コーナーを味わう』

足立 則夫 著(日本経済新聞社) 2005年

記録的な猛暑の夏もようやく終わりました。人間って、不思議な生き物ですね。快適な気候の秋を迎えると、食欲とともに購読欲も俄然、復活です。そうです、読書の秋の到来ですね。在学中に読んでほしい本は山ほどあります。さんざん迷った結果、私のかつての同僚が書き下ろした一冊をご紹介します。

本の名前は『遅咲きのひと』(日本経済新聞社刊、2005)。著者は、現日本経済新聞社特別編集委員の足立則夫さん。与謝野蕪村から始まり白川静先生に至る51人の「遅咲き」の大人(たいじん)が紹介されています。白川先生のことは、大の大先輩だもの、立命館大学なら知ってるよね。字数の制約もあるので、ここでは宮本常一さんを例に「遅咲き」の大切さをお話したい。私は常一さんとは残念ながら惜しいところで面識がありません。氏の設立された日本観光文化研究所に息子、千晴さんを訪ねた前年に亡くなってしまっていたから。日本の民俗学の第一人者、柳田国男先生と双璧とまで称される大学者ながら、常一さんとは随分と気安い呼び方と思われまじょうが、私の知る限り誰もが「常一さん」と呼びます。そこにこそ、大学者・宮本常一の真骨頂があるのです。彼は確かに遅咲きでした。山口

県の周防大島に生まれ、小学校教師などを経て苦勞を重ねながら民俗学者として評価を積み上げ、武蔵野美術大学教授に就任したのが57歳。73歳に没するまでに民俗学調査で訪ね歩いた距離は実に、地球4周分の16万キロに達するといわれます。まさに、現代の伊能忠敬ですね。残された膨大な著作は未来社から『宮本常一著作集』としてすでに刊行されていますが、この46巻でさえまだ一部でしかない。「各地の伝承を残さなければならない、という使命感と、未知なるものへの好奇心、これを最晩年まで持ち続けたからこそ、前人未到の偉業を成し遂げられたのだろう」と足立は結んでいます。

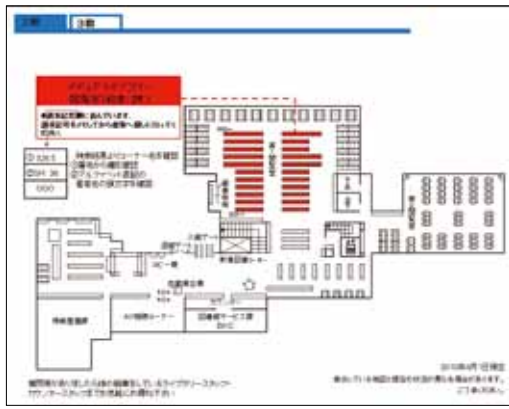
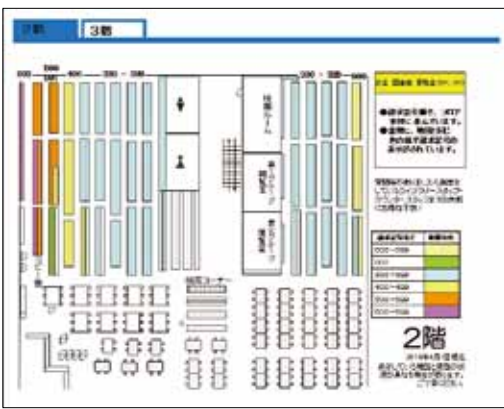
私は立命館大学で、全学を対象とするキャリア教育を担当しています。昨今、キャリア教育という呼び方をよく耳にするようになったでしょ。キャリア(Career)とは轍(わだち)を語源とし、山あり谷ありの人生を一本の轍でつなぐ大切さを意味します。なのに、昨今のキャリア教育はどうも世知辛い。卒業後のなんとやらも大切だけど、人生は長いんだ。もっとゆったりとした目線でとらえてもいいんじゃない? 本書は、そんな51人の大人(たいじん)たちに学ぶ、真のキャリア教育指南書なのだ。

# 館内MAP表示サービス開始

2010年7月より、RUNNERS検索結果に応じた各図書館の館内マップが表示されるようになりました。(雑誌等一部除く)  
 今回のサービスはRUNNERSの検索結果画面を見て探している資料をより効率的に確保できる仕組みを作ることで、学生の皆さんの学習を支援したいという学生ライブラリストaffの声がかっかけて実現しました。検索結果の画面を見ても資料現物をうまく入手できなかった経験がある方はぜひ、この機能を活用してください。



検索結果画面で「配架場所」の1つをクリックすると



その場所の書架がハイライト表示されたマップが表示されます。

## e-DDS サービス開始

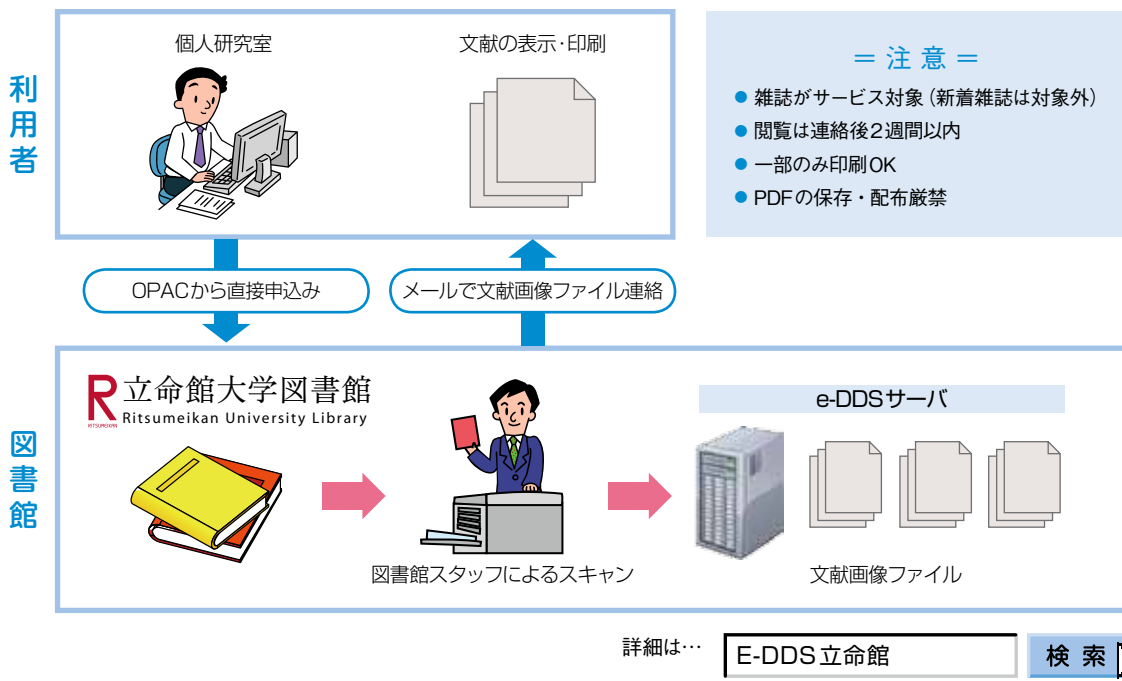
**e-DDSサービスとは** — 図書館所蔵の文献複写の申込から閲覧までを、Web上で行うサービスです。  
e-DDSを利用すると文献入手のために来館する必要がなくなります。

■ 利用できる方は、立命館大学の教授、准教授、専任講師、助教、講師です。

(特別招聘教授(兼務)、客員教授、チェアプロフェッサー、客員准教授、特別招聘准教授(兼務)、大学非常勤講師の方は現在サービス対象外とさせていただきます。)

■ 支払いは給与天引きのみです。— 料金はA3までPDF 1枚20円。

■ 申込は学外からもできますが、文献の閲覧は学内ネットワークからのみ可能です。



## リザーブブック制度開始

**リザーブブックとは** — 「授業の理解を促進し、学習を深めるために必要な図書資料」のことです。これらをより多くの学生が利用できるよう、通常よりも短い期間で貸し出す制度を2010年4月から開始しました。

例えば、先生がレポート課題の参考図書の一つとして図書資料を指定した場合、多くの学生が必要とするので、通常貸出だと、利用できない学生が多数でできます。このような学生の不利益を緩和するための制度としてリザーブブック制度があります。

リザーブブックは当日貸しなので、一旦館外に持ち出しても、閉館までに返却する必要があります。この点に留意して利用をしてください。リザーブブックはもちろんOPACから検索可能です。先生から授業中にリザーブブックとして紹介されたら、ぜひ図書館にて利用してみてください。

**実施館:** 衣笠図書館・メディアセンター・メディアライブラリー

**貸出期間:** 当日貸出(貸出手続きをした当日の閉館時刻15分前まで)

詳細は…

# 「RAIL」運用開始

2010年3月に、情報検索のオンライン学習ツール「RAIL」が図書館ホームページ上に公開されました。新聞記事や雑誌論文の検索方法だけでなく、Googleで得た情報の落とし穴や、レポートへの引用方法など、情報検索活用の基礎を自分のペースで学ぶことができます。次の項目のうち1つでもYesにチェックが入った方は、「RAIL」をぜひ活用してください。

- レポートを書くための材料集めは、GoogleやYahooで十分だと思う。
- 探したい情報を探しきれず、あきらめたことがある。
- 探し出した情報の信憑性が高いか低いか、見極め方がわからない。
- 本を読んで得た情報は、自分の考えとしてレポートに書き写している。
- 図書館で借りられる冊数の上限を、実は知らない。
- 論文のフルテキストを検索して表示させる方法がわからない。

YES	NO
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>



## RAILの内容を一部紹介します。

これがRAILの入口です。

図書館トップページ ▶ RAIL (情報検索E-Guidance)

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/mr/lib/rail/index.html>

学部ごとにデータベースやキーワードが異なります。学部を選択してください。



学部を選ぶと、学部別のトップページが表示されます。章ごとに内容が分類されているので、学びたいコンテンツを選んでください。

最初から最後まで通して学んでもOK。  
学びたいコンテンツだけピンポイントで学んでもOK。  
関心度にあわせてコンテンツをクリックしてください。



各ページのコンテンツを読んで習得してください。



章末クイズにチャレンジすると、習得度をチェックできます。

このほか、情報教室で情報検索のガイダンスを随時開催しています。図書館内のポスター等で日時・場所をチェックして気軽に参加してください。また、図書館のカウンターでは、情報検索に関する相談を受け付けています。探し出せない情報があれば、図書館スタッフにご相談ください。

## 📖 図書館PRポスター（図書館長賞）紹介



学生が学び交流する身近な場として図書館への関心を高めてもらうことを目的として、2010年度前期に環境・デザインインスティテュートの専門演習（担当：佐藤典司 経営学部教授）に所属する学生の皆さんに班毎にポスター作成に取り組んでいただきました。ゼミOBの方々にもご協力いただき、「図書館長賞」として完成したポスターです。皆さんもぜひ、「知らない」を探しに図書館に来てください。